

# 全カリはどこへ向かうのか

## — 「全カリ歴代部長座談会」を終えて—

山本 博聖

4月に入るとすぐに新任の先生方向けの様々なオリエンテーションが始まる。チャペルからの説明、教務部からの説明、そして全カリもある。このオリエンテーションはわたしの部長の時期からおこなわれるようになった。全カリへの先生方のかかわりは、立教に来られてすぐではなく、本学の風土や考え方、仕組みなどを自分のものとして理解された頃からは、というのが大方の考えであった。しかしここ数年の本学における改革による学部学科新設の動きは、本学に新たに着任された先生といえどもそのような時間的猶予を考慮する余裕がなくなってきたようである。それが、もう10年が経過しようとしているが、最近になって大学として行う新任の先生方へのガイダンスの一つと位置づけられた理由であろう。毎回パワーポイントも用いてわかりやすく伝えようとしているが、さてその効果は。

初代部長の寺崎先生、2代目所先生そして庄司先生へと受け継がれ現在はわたしが全カリ部長を務めている。全カリがカリキュラムを展開し始めてこの3月で丁度10年が経過する。この時期にこれまでの部長が集まって対談をしてみよう、との企画が持ち上がった。全カリ部長というなんとも不思議な役職の経験者がそれぞれの任期においていかに考え、何を伝えようとし、どこに一番苦労したのか、そして何が心のまた毎日の任務遂行に当たっての支えになったのか、を語る会とし、司会を全カリの申し子とも呼べる青木文学部教授に引き受

けていただいた。青木先生は全カリ創成期から運営委員、特別教務委員、そして英語研究室室員を歴任され、2005年度全カリが特色GPに選定された取り組みである「立教科目」の仕掛け人のお一人でもあり、そして、1996年度理学部選出の運営委員として全カリに関与し始めたわたしの教育係と言える存在であった。

1997年4月のカリキュラム開始よりも2年半ほどさかのぼって運営センター組織はスタートしていた。初代部長寺崎先生がこの極めて挑戦的な、いわば常識はずれの組織の舵取りを引き受けられたのである。全カリ組織のつくりもまたその運営方針もいわゆる民主的とは呼べないスタイルである。トップに位置する全カリ部長の人選も運営委員会での承認後に部長会で人事議案事項として取り扱う、となっているが、実はその前に総長のYESを必要としている。その運営もきわめてトップダウン方式である。基本となるカリキュラム構想を企画し、骨子を作り上げる各教育研究室の主任は全カリ最高決定機関である運営委員会のメンバーではない。主任の活躍の場はそれぞれの構想小委員会までである。

立教大学の教養教育の責任を担ってきた一般教育組織と明確に決別をし、「全学が支える全カリ」方針を組織的に担保する方策としてこの方式がとられたようである。教育研究室の新たな企画や試みは、構想小委員会において学部選出の運営委員と部会長に納得行く説明がない限り、決定の場である運営委員会に出てくることはない。こういった大切

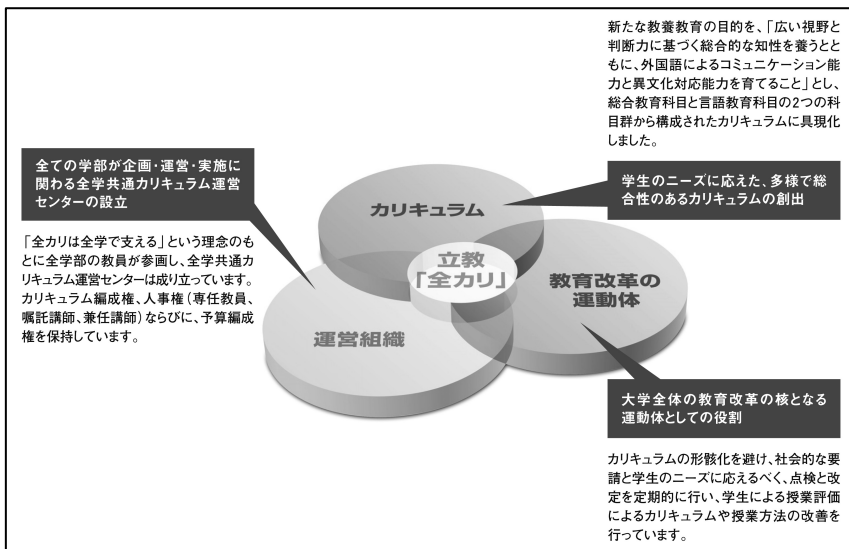
な働きを課せられていることをどの程度学部選出の運営委員が理解されているのであろうか。全カリスタートによって、すべての先生方に、全カリで展開される科目担当にあわせて学部選出の運営委員に選出され全カリ運営に直接かかわることが起こりえることとなったのである。わたし自身最初の全カリとの関わりはカリキュラムが動き始める1年前に理学部選出の運営委員としての役割が最初であった。当時の正直な気持ちは大学教育研究フォーラム第2号の編集後記に記したとおりで、普通の教員の理解のレベルはこの程度ではなかっただろうか。

「とにかく動き始めるまでにこれだけのエネルギーと周到な準備をした組織があるのだろうか」「動き始めたら動き始めたで、毎回毎回の運営委員会は夜の10時、11時まで行われ、そこで白熱した議論が戦わされている」「このような組織・仕組みはどこの大学でも出来ないのでは」「こんな全カリっていったい何だろうか」など、すでに10年近く前のことであるが、ほんの少し前の出来事であったかのように話は尽きない。そして何度となく、様々なところで報告されてきているが、10周年を期しての座談会でも「全カリを支え続けている全カリ事務職員の優秀さがあってこそ全カリが大きな故障(?)もなくここまでやってこれていると実感している。自分の役割を十分に理解していない教員(執行部メンバーや部長と言えどもそうであるが)と辛抱強く付き合い、必要な指示を適切な時期に示し、他大学からの問い合わせにも支障なく対応するなど、このようなすばらしい働きで支えられている全カリ部長は部長会メンバーの中では最も恵まれている」ことを改めて全員で確認した。

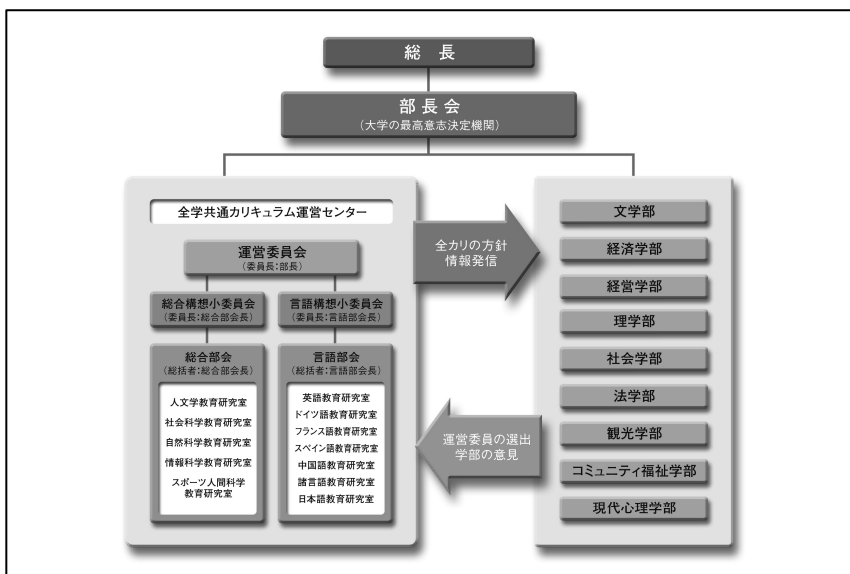
新たな教養教育の挑戦として立教全カリは注目をされ、さまざまな場所での

講演や全カリへのヒアリングなどが今もなお継続している。専属の教員は持たないが全カリ部長は大学の最高意思決定機関の正式メンバーであり、独自の事務組織を有し、全学が支えている全カリは今「第2ステージ」が協議中である。いかなる方向へと全カリは行くのか、これは全カリに閉じた議論ではすまない。それは全カリが立教の誇りであり続けているからである。

## 全学共通カリキュラムの概念図



## 全学共通カリキュラム運営センターの組織



全学共通カリキュラム運営センター略年表

年	年月日	記事		全カリ部長	総長
		大学	全カリ		
1955.4 1969 1973	1955.4	一般教育部設置			72.4～ 佃 正典
	1969	大学紛争 ＜教養学部構想＞			
	1973	全学カリキュラム委員会設置  ＜新学部構想＞			
1990	1990.4	新座キャンパス開校			75.4～ 尾形 典男
1991	1991.7 10.14	文部省、大学設置基準を改正（大綱化）	「全学カリキュラム検討委員会」発足		83.2～ 高橋 健人
1992	1992.7.15		答申「21世紀をめざす立教大学の全学カリキュラムについて」(ブルー・パンフ)		86.5～ 濱田 陽太郎
	9.30		「全学共通カリキュラム運営センター組織図・規程」の検討始まる		
	10.26 12.20		「全学共通カリキュラム作成委員会」発足 「全学共通カリキュラムに関する答申」(ホワイト・パンフ)		
1993	1993.11.24		全学共通カリキュラム運営センター規程決定		
	1994.1.25		「全学共通カリキュラム運営センター準備委員会」発足		
1994	10.31		「全学共通カリキュラムの編成・実施に関する答申」(グリーン・パンフ)		
	12.1		全学共通カリキュラム運営センター発足		
1995	1995.3.31	一般教育部廃止 (3分野の教員は学部へ)			94.5～ 塚田 理
	1995.4.1	大学教育研究部発足			
	1996.3.21		『大学教育研究フォーラム』第1号発刊	94.12～ 寺崎 昌男	
1996	11.29		全学共通カリキュラム説明会実施		

年	年月日	記事		全カリ部長	総長
		大学	全カリ		
1997 ①	1997.4.1	ランゲージ・センター開設	全学共通カリキュラム全面实施	97.4～ 所 一彦	97.4～ 塚田 理
	6.1	「立教大学白書(1997年版)」刊行			
	1998.3.31	大学教育研究部廃止 (言語・スポーツ教員は学部へ)			
1998 ②	1998.4.1	観光学部・コミュニティ福祉学部開設			
1999 ③	2000.3.1		「総合A専任担当ルール」提案		
2000 ④	2001.2.14		『全カリのすべて』刊行	00.4～ 庄司 洋子	98.5～ 大橋 英五
2001 ⑤	4.1		2001年度総合カリキュラム改革実施 「立教科目」「時事科目」開設		
2002 ⑥	2002.4.1	独立研究科開設	池袋・新座統合カリキュラム実施		
2003 ⑦	2003.3	「立教大学白書(2002年版)」刊行			
	2003.4.16 9.	将来計画推進本部 (2006年度アカデミックプラン)開設	Web登録導入 第1回特色GP「全カリ」不採択通知		
2004 ⑧	2004.4.1	法務研究科開設		04.4～ 山本 博聖	02.5～ 押見 輝男
	8.		第2回特色GP「英語」不採択通知		
	10.7	リサーチ・イニシアティブセンター開設 大学教育開発・支援センター開設	外部評価ヒアリング実施		
	10.16				
2005 ⑨	2005.7		第3回特色GP「立教科目」採択		
	7.30	「認証評価報告書」刊行			
2006 ⑩	2006.4.1	経営学部・現代心理学部開設	2006年度カリキュラム改革実施		06.5～ 大橋 英五
	10.26		「全カリ第2ステージ」検討委員会答申		
2007 ⑪					